



1982年(昭和57年)
3月号(No. 441)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- サリーン総裁よりの書簡(上) 海外委員会……………(1)
- 海外の山では……………(2)
- ネパール・ヒマラヤの旅(俳句) 秋山幹夫……………(3)
- 大木 操さんのこと 小野 幸……………(3)
- 特集・図書紹介……………(4)
- 「ハチンダール・キッシュ」
- 「新岳人講座」「山岳スキー コースガイド」
- 「飯豊連峰」「山の紋章」「世界登攀史」「空撮 北アルプス」「西上州の岩山」
- 「カモシカ物語」「垂直の上と下」「雪崩の世界から」
- 東西南北……………(4)
- 三水会現地山行、和久田弘一氏からの手紙、アルタイ山麓の冬、十句
- お知らせ……………(9)
- 報告……………(9)
- 高所登山委員会、集会委員会
- 会員名簿の誤植訂正について 総務委員会……………(10)
- ルーム日誌・会員移動……………(11)
- カット/吉阪隆正・芳野満彦・松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

留守番電話(電話番号231-6659)

で直ちにカーギルまで降ろす。陸軍軍医の診断の結果は肺にも脳にも異常なし。坂口はスリナガルにて入院す。彼は凍傷及び潰瘍にかかる。後日帰国する。

2、杉並勤労者山岳会隊

隊長 栗山 博

目的地 KUNピーク

一九八一年八月九日に副ディレクターはカーギルの警察署長より無線連絡をうけ金沢直子と矢島みよ子は重態であるから至急ヘリコプターをよこすようにとのことであり、翌十日空軍のヘリコプターを出したが、非常な悪天候にて着陸できず。よってリーベスから他のヘリコプターを送ったがこれも悪天候に妨げられた。十一日にクン山のベースキャンプに着陸したが、金沢直子は既に八日に息を引きとっていた。矢島みよ子は無事ヘリコプターにて病院におくられ治療をうけた。彼女は脚や顔にむくみがきていた。金沢嬢は肺気腫にかかっていた。

3、学習院大学探険部

隊長 成沢珠樹、香椎正純

目的地 ドランドラン氷河を越

山をきれては「山」は持ち帰る



カトマツズより/吉阪

インド・ヒマラヤ遭難事故に関する インド登山財団

サリーン総裁よりの書簡(上)

海外委員会

一九八一年はインド・ヒマラヤにて数多くの遭難事故があり、インド登山財団、サリーン総裁より詳細な報告が本会会長あてに送られてきた。

原文は海外委員会のファイルにあるが、左記の如く要約し、今後ヒマラヤ遠征を計画する場合の警告、教訓として熟読して欲しい。勿論、不可抗力の場合もあるが、サリーン会長が述べておられるように、然るべき準備やリエゾンオフィサーを加えるとかすれば、ある程度避けられたに違いないケースもあるように思えた。

(佐藤テル)

一九八一年十月二十九日付サリーン総裁よりの報告の概略は左の通りである。(文中氏名は音読による)

一九八一年はこの外われわれにとって運の悪い年で、多数の遭難を出しました。インド・ヒマラヤでの最大数、死者二十五名であり、この中に十五人の日本人が含まれます。日本よりの遠征は十九隊であり、七隊が遭難しており、わが財団としては出来得る限りの救援活動をし捜索に当りました。小生は全ての遭難を綿密に調査しました。

このような遭難を最少限に止ど

めるためにも、詳細を貴下に報告致します。

1、青と白同人カシミール登山隊
隊員 九名

隊長 三好幹男

目的地 KUNピーク

一九八一年五月十九日中川直および坂口雄二は頂上を目指し六〇〇mにCIIを設置す。翌日より天候悪化し、坂口は目まい及び頭痛を感じ始めた。二十一日に第二次登山隊とリエゾンオフィサーがCIよりCIIに登る途中無線連絡をうけ、坂口は意識不明となり下山不可能と知る。隊長は二十二日にヘリコプターの要請をする。リエゾンオフィサーは四〇〇mを歩き九二日かからカーギルに到着し副コミッショナーに遭難報告をし当財団は直ちに空軍のヘリコプターの要請を行った。しかし二十五日も悪天候のため着陸不可能で二十六日再度決行す。坂口および他の三名も高山病に悩まされているの

えてキシワー側へ。

両者は当財団に通告もせず、八月七日に四〇〇〇のペンシ・ラ峠近くにベリースキャンピングを張る。一名のガイドを連れ四七〇〇の辺にアドバンスキャンピングを張りそこに泊まる。九日に三人は九時より四時半まで氷河の偵察をした。ガイドは同地区はすぐ危険であるから、と中止をすすめたが両者はどうしても氷河横断を決行すると言う。ガイドは八月十日にベリースキャンピングに下ったが、両者は一五〇のザイルを持ちアイゼンをつけて出発した。

先頭を歩いた香椎は午後二時半にクレバスに落ちた。ザイルが届かぬ程深く、成沢はアイスクリューでロープを縛り、もう一つのアイスクリューで自分の体を繋ぎクレバスの底をのぞいたが、香椎の姿は見えず、声だけが聞こえた。香椎は胸まで水につかっていた。クレバスは滝にかぶさっていたのだ。

午後三時半イタリア隊のベリースキャンピングに救援を求めに成沢は出向き、九時十五分にそこに到着した。

イタリア隊のリエゾンオフィサーはカーギルに通報に行くための車を見つけることができず、翌十一日の午前六時にイタリア隊員、成沢およびガイドが事故現場に行く。一方イタリア隊のインド

のリエゾンオフィサーはカーギルに事故報告に行く。

イタリア隊の登山者も事故現場に救援に向かったが成沢はすっかり転倒し、現場を発見できない。リエゾンオフィサーの報告を受けた副コミッショナーは空軍ヘリコプターの要請をし、空軍ヘリコプターは現場に到着したが、香椎をクレバスより救出できず引返したので、改めて地上救援隊を十四日に現地に送った。そのうちの数名が遭難した程天候は最悪であったが、既に死亡していた香椎をクレバスより収容できた。

この二名の日本人は当財団または政府関係からの情報もくはずにザンスカール地域に出かけた。もしも経験あるリエゾンオフィサーを伴っておれば敏速な救援ができたであろう。

4、日本ロック・クライミングクラブ

隊長 松本正城

目的地 ジャレム及びカシミール地区のKUN

松本隊長外二名はリエゾンオフィサーを伴い八月十六日に四四二〇のベリースキャンピングを張った。

十九日に五二〇〇のCIIを、二十一日に、五八〇〇のCIIを、CIIIを五二〇〇の氷上に張る。

頂上直下の六八〇〇で二十六日にビバーク。出来るだけ身軽にと考え寝袋も、充分な食糧も持たな

海外の山では

今回はSACの月報「Die Alpen」に、『昨年十一月、ベルンで行われたラインホルト・メスナーの講演会に寄せて』と題するレポートが載ったので、これを紹介します。(編集)



大きな、何か過ぎ去った日の栄光を思い出させる会堂は、幅の広い湾曲したスクリーンと、待ちこがれる人々で占領されている。講演は五分前に始まる筈であったが、まだ大勢の人が入りこんでいるようだ。やっと一人の男が演壇に歩む。彼か？ いや違う。彼の助手だけだ。メスナーが山でやったことの意義を述べ、彼の業績を賛え、彼の本の宣伝をするのだ。そこへ元気のいい足どりで数歩、階段にとび上がりながらメスナーが聴衆の前に現れた。"Climbing is a game", 過去十五年、登攀は急激に変革している。それは、特に人工的補助具が自発的に放棄されたためだ。

メスナーは感動的に話をする方法を知っている。二種類のスクリーンに映像が写され、また消え、新たにまぶしがらせる。水で武装した山の姿は危険を予測させ、遠征隊の雰囲気的印象づけ、遠い、純潔な大陸への憧れを呼び起こす。考えられ、組み立てられた文で、メスナーは、彼の体験を客観的にしかも同時に直接的方法をとって語りかけることを知っている。示さ

れた業績も、写真も、説明も、全て一つに調和している。この完全さはもう専門的な素質を示している。そんな間にメスナーはわれわれに一つづつを与え、彼の計画と思いの中にとり込む。聴衆はこの精神的自己陶冶や高度の肉体的努力の光景を通して、魅力にとりつかれる。メスナーは広大な風景や、今日大きな破壊の中に置かれていた古いチベットの文化を紹介し、そこでも聴衆を魅了することを可能にする。

メスナーはこの僧院の街ラサから、天候が荒れ始めた中を、最後の力を出して、一人で克服したエベレストの頂上までわれわれを連れて行く。終りに拍手喝采を受けるのは確かだ。

だがしかし、思い返しながらさかな不安は残る。ここでラインホルト・メスナーにより示された思想と感覚は、実際に彼が山登りの過程で経験した通りに純粹にその精神状態を再現しているかと理解することが出来るのか？ それと、冒険、神秘、哲学、人工批判、環境保護意識そして個人主義(僕は国のために登るのではないし、党派のために登るのではない。ハンカチが僕の旗なのだ)といった要素が、聴衆にほば出来のよい効果的作用を及ぼすよう、夫々に組み合わせられているように見える。だから、メスナーは適当にねらいを定めた話しによって、またこの驚くべき調和を意識的にひき起こそうとねらっているのではないか、といった疑問が当然出て来るのだ。

彼が特に人工的補助具の自発的放棄を主張すること、もう初めから一般の同情を得ているのではないか？ だがしかし、彼はここでまた誤解を助長してはいらないか？ 技術を意のままにできる(高度八千以上の飛行機でおこなう医学的テスト、靴やテントに使用する新式の物質など)という可能性がすべてないなら、メ

かった。二十七日朝八時三十分にビバークより頂上に向かいシュンジは十一時四十五分に頂上に、ヒデキは十二時十五分矢張り頂上に達した。両名が下山の途中頂上より二〇分下で松本に会った時、松本は彼をCⅢで待つように、そして自分はビバーク地点で夜をあかすからと言って頂上に向かった。しかし二十八日に松本はCⅢに現れなかったで、二人はカメラのテレレンズで探したが全然見当らない。午後には益々天候悪く、食糧も底をついたので、ベースキャンプに下ることにした。二人は、多分松本は何処からか墜落した、食糧も寝袋もなく三日間無事にあの高度で生存するのは不可能、とあきらめて下山。三十日にベースキャンプで状況をリエゾンオフィサーに報告した。ヘリコプターをたのむには標高は高すぎるし、捜索は無駄と考えた。リエゾンオフィサーは三十一日下山し、九月一日夜半にカーギルに着き、事故を副コミッショナーに告げた。直ちに彼は引き返し、ベースキャンプに二日夜到着すると、凍傷にかなり最悪の状態で生きている松本を発見した。彼は雪盲になり方向を失った。食糧もないまま五日間の死闘の末ベースキャンプに戻れたのである。これは驚くべき奇蹟であり、素晴らしい勇敢なる行動である。リエゾンオフィサーは直ちに空からの救援をたのむため三日早

朝カーギルに引き返した。彼がカーギルに到着するや早速四日に空軍のヘリコプターで救助し、陸軍病院に収容した。後日健康を回復し日本に戻った。

5、一ツ橋大学山岳部

隊長 中村宜幸

目的地 ホワイト・セール

この三名はホワイト・セール登山許可を受け、リエゾンオフィサーを連れて出立した。出立に先き立ち九月十五日頃バアラアシングリ氷河のベースキャンプに帰る予定と告げた。九月六日にベースキャンプに戻ったポーターはリーダーよりの手紙を持参し、それには五七〇〇に到達し十日に頂上へ向かうと記されてあった。

スナールの業績そのものも全く成り立たないというところがそこでは忘れられている。確かに今日は技術的費消を少しで間に合わせようと試みられている(スポーツ・クライミング、△無酸素登山、小規模遠征隊、しかし性能の高い装備はより以上に頼りにされている。

多分ラインホルト・メスナーにとってこういった言葉は、失礼にあたるだろう。だが、かなり強力に実行され、完全に実行するために骨組が与えられている、というふれこみに直面すると、そういった予測がまったく不適当とは言えないのだ。

ベースキャンプに向かい、二十二日午後そこに到着し、なお登りつづけた。カーギルの警察署長も加わり、二十五日朝バタールに到着。天候は再び大荒れとなった。マナリーの登山学校からも救援隊が送られた。最初の救援隊は悪天候のためこれ以上の救助活動は続けられないとベースキャンプに戻

大木操さんのこと

最悪となり視界ゼロとなる。だが救助隊は雪庇がくづれ、その下に沢山のデブリの出ているのを見た。三名の所持品を多数発見し、日本大使館の遠藤一等書記官にそれらを渡したが、三名を発見することはできなかった。空軍による徹底的捜索がなされた。(以下次号)

ネパール・ヒマラヤの旅

秋山 幹夫

秋日沁む後宮址に鳴る泉
パゴタの日享けて靉靆飛ばしをり
頭に懸けてポーター運ぶ登山の荷
シェルパの踊りの影やキャンプの火
銀河濃しキャンプの裾を閉ちかねて
氷壁に暁紅のぞくエベレスト
氷河澄む朝の大路や牛歩む
削ぎ立てる雪嶺青く夜もひかる

ってきた。

れ、日本の捜索隊とともに隊長の父君、中村氏もマナリに着かれた。登山学校の指導員はCⅠとCⅡの間に降下し、捜索中雪崩に逢い、五、六時間の苦闘の結果、自力で這い出しCⅠに着いた。二十六日に日本からの捜索隊も引き上げた。

小野 幸

秘書にその旨をお願いしておいた。数日して、来い、と電話で言われたので、早速うかがった。小ぶとりの紳士で、ニコニコされ「木暮さんにはほんとうにお世話になったんだ。君も山が好きなのかね」というわけで早速募集の賛助員になっていただいたのである。それから山のお話しなどをうかがいにお部屋をちょいちょいたずねるようになった。しかし、副知事という仕事は外へひっぱり出されることや会議が多いので、お会いできないこともあった。お宅もわたしの自宅とは都庁からそれぞ

第二次救助隊は二十二日にAB Cに到達し、CⅠに登ったが、それ以上前進はできず、天候はまた

もう、ずっと古い話になるが、大木さんに三年ほどわたしは上司としておつかえしたことがあった。終戦間もなく安井都知事が三人の副知事をきめられた、その内の一人が大木さんだったのである。間もない頃に友人が、大木さんは上高地でウェストンを撮ったんだそうだよ、と聞かせてくれた。それで安井さんにそれとなくおたずねしたが「一高の生徒だったよ」ぐらいしかわからなかった。たまたま、その時、木暮理太郎先生のレリーフ建立の募金をしようとしていた時なので、賛助員になっていただこうと、大木さんの

れ反対なのでうかがうまではしな

かった。

日本アルプス登山のこと、日高信六郎さんや黒田正夫さんなどの思い出話もされていた。その頃は冒険とか探検とか言う言葉が流行していて、よく徒歩旅行もしたし、雑誌の夏季特別号などには一高生が登山記や旅行記、あぐくのほてには史蹟案内記の単行本まで出したものだった、とのことであつた。

その頃の大木さんをもうお年寄りぐらいに感じて山へは一度もおさしなかったが、まだ六十になられたかどうかと言う頃だったわけで、残念でならない。

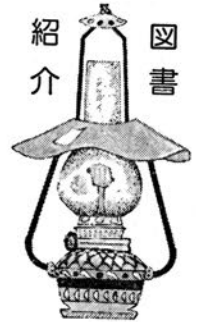
余談になるがその三人の副知事のお一人、住田さんは船舶史の研究者であつたので、わたし達は山男と海男だ、と言ひあつたこともあつた。

大木さんが副知事をやめられてからは、まったくお会いせず終つた。わずか一瞬のめぐりあいであつた。



特集・図書紹介

図書



紹介

ハチンダール・キッシュ 七・一六三 m

一九七八年山嶺登高会
カラコルム遠征隊編

ハチンダール・キッシュは、カラコルム山脈パツラ山群に属する未踏峰である。一九七八年夏季、緑川広氏を隊長とする山嶺登高会パーティ七名は、同峰西面バルタール氷河からの初登頂を目指した。しかし、この試みは結局失敗に終り、さらにはその下山中に一隊員の転落死亡事故にも遭遇する結果となる。本書は、同隊によるこの登山及び遭難事故等に関する報告書だ。

本報告書の内容は、目次に従えば次の通りである。「狂気と正気のはざまに」(Sunder's Expedition) といふことにかえて「隊の構成」第一部「登山の実践」第二部「資料編」御協力者名簿「英文概要」編集後記。

まず始めに、筆者は、失敗に終りしかも死亡事故にまで見舞われた登山隊が、かくも内容豊富な報告書をまとめられたことに、大きな敬意を払わずにはいられない。しかし、それにもかかわらず、筆者が本報告書を一読して感じたことは、一般論として、そもそも海外登山隊の報告書とはいいたい何のために、そして誰に向けて書かれたのか、換言すれば報告書に要求される視点とは何か、という疑問である。というの

は、本報告書からはこの視点を読みとることが極めて困難だったからである。

本書は、「報告書は、自分達の報告であると同時に、それが次の世代への礎に価するものでなければならぬだろう」(編集後記)とする。しかし、もしそうならば、この両者の関係は並列なのではなく、手段と目的との相関として捉えられなければならない。「自分達の報告」という意味は不明瞭であるが、これを自己の隊を客観化した記録と解せば、かように客観化された「自分達の報告」を通して、それを知らしめることによって、後進に何を汲みとらせ、それを如何に位置づけさせるのか、という視点こそが必要とされるのである。つまり、報告書に要求される「自分達の報告」とは、その登山隊の思想・信条であり、また、それらに裏づけられた行動の記録なのであって、決して個人個人の赤裸々な心情吐露でもなければ、「想い出日記」的な苦勞話の記録でもないはずである。

本報告書は、「本来ならば、パツラ山群の山座同定を中心にして、社会人山岳会が日本国内での山登りを、ヒマラヤの中でどれだけ忠実に実践できたかを中心に編さんする予定であった」という。その試みは随所には見られるが、もしそうならば、「この計画がここまでこれたいきさつをまとめてみる価値はある」などと後退せず、当初の視点をあくまでも追求すべきだ。

なお、細かいことではあるが、注記の活字は一ポないし二ポ下げなければ大変読みづらいことを付け加えておく。

一九八〇年一月二十日刊、A四、一四二頁、非売品

新岳人講座 全九巻

東京新聞出版局

山岳雑誌「岳人」四〇〇号記念出版として発行されたもので、「岳人」二〇〇号から四〇〇号までに掲載された主要な紀行、論文、画文、研究などを全九巻にまとめている。創刊号から二〇〇号までのものは「岳人講座」として春夏秋冬の四冊に分けて発行されていたが、今回のものはその線に沿ってさらにこまかく主要記事をピックアップしている。

第一巻アルピニズムIは日本の登山史を中心としたもので、二〇〇号に載った「日本主要登山史年表」(山崎安治)は一九八〇年までの主要年表が追加されている。第二巻アルピニズムIIは主として登山思潮について、第三巻、第四巻は技術と用具、第五巻日本の山は数少なくなった一九六〇年代から七〇年代にかけての日本の山のバリエーション・ルートの記録をまとめ、第六巻はヒマラヤ、カラコルム、ヒンズークシユの記録、第七巻はアンデス、アラスカ、アルプスの記録をとりあげ、第八巻は山と文学、第九巻が山と科学となっている。

山岳雑誌というものはなかなか貴重な記事が出ていて、私などもしまつておくことが多いが、いざ必要と思うときに、さてどこだったか、ととまどうものである。また全部揃えて部屋に並べておくというわけにもいかない。そうした意味からも、この講座は利用価値が大きいと思う。ことに第一巻、第五巻、第六巻、第七巻などは登山記録を中心としてあるものだけに読みごたえがある。

三水会現地山行

第三回

高尾山家族ハイイク

家族ハイイクということだが、家族としては織内さんのお孫さんのジュン君とケイ君、大野夫人、富田の知人二名だけでいささか寂しかったが、好天に恵まれ十四名が楽しい一日を過ごした。

高尾山二等三角点までは集合場所の連絡の手違いもあったが、稲荷山コースの十一名、琵琶滝コースの三名に分かれたがそれぞれのお楽しみハイイクで十一時には全員高尾山頂に立った。十三州大見晴台の標柱の前で記念撮影と小休止の後、裏高尾縦走路を東へ、小さな登り下りを繰り返して三十分後に一丁平園地に到着する。

スギやヤマザクラに混じってシラカバがかなりある。休憩用の卓や椅子も整理されていて、ここで昼食をとることにする。味噌汁を作ったりワインを飲んだりのうち一時間が経過する。一丁平から四等三角点のある城山までは十五分の歩程、この城山にきてようやく相模湖を俯瞰する。また北方には景信山やもっと遠方の奥多摩連山が望まれる。

城山の西南斜面の草地で参加者一同縄飛びに興じ、それからこの日の最終コースをとる。城山から小仏峠、小仏集落へ、小仏発十四

昭和五十五年十一月〜五十六年七月、東京新聞出版局編、A5判各巻三〇〇〜三五〇頁、定価各三千円 (山崎安治)

山岳スキーコースガイド

小林政志著

この本は、同人組織であるスキーアルビニズム研究会とその創立者の峰岸常之氏の実践と踏破記録の集大成である。また山岳スキーをめざす初心者入門書とコースガイドの二面をもった図書とも言える。内容は、手引き編とコースガイド編の二部に分かれています。手引き編の前半は、初心者にもわかり易いよう装備用具、技術、天候積雪状態を説明し、計画から実施までのポイントにも触れている。後半は、山岳スキーのグレディングについて述べている。これはこの本の核心部であり、その後続くコースガイド編の導入部分でもある。自然を軽率にとらえずというそのしりもある程度まぬがれないであろう」と本文にもあるが、あえてグレディングを試みた真意は、初心者の入門書ということにこの本の主眼を置いているからと思う。山行の計画段階で計画者自身が、ある程度コースの難易度を判断出来る目安の提示をするというところであろう。このことは、今後脱グレンデ化志向により山岳スキーやツアーによる「防ぎうる事故を計画段階で防ぐ」定量的な目安となる勇氣ある提案であると思う。山岳スキー愛好の一員としてこの提案に敬意を表します。これからは底辺の広がっていくと思われるこの分野の専門知識(具体的な遭難救助方法等)が要望されてくるであろうし、指導者の育成が今後大切な課題になるだろうと読後感じた。

この本は山岳スキー界の一つのエポックとなるだろうと感じる本である。

一九八一年一月二十五日発行、たいまつ社、二八二頁、千五百円 (小林政志)

写真集 飯豊連峰

山と花

小新井実著

飯豊山はあらゆる意味で、最も日本的な名山のひとつと私は思っているが、その名山飯豊があまり知られる機会がなかったのは、飯豊山に照準を合わせた書物が殆んどなかったことも原因の一つだろう。

飯豊山のみに限定した本としては、山形県総合学術調査会の『飯豊連峰』という大冊の学術報告書があったが、登山の分野からアプローチしたものとしては本書が初めてであり、飯豊山にとっては画期的なことといえよう。同時に、会津喜多方在住の著者が二十余年の飯豊歴を背景に取り組んだ本書刊行への意欲は、その意味で高く評価されよう。

構成は、写真一二八頁(カラー一三七枚モノクロ三四枚)と、「飯豊を語る」と題した解説文二七頁(飯豊連峰のすがた・同山・同花・飯豊参りと習俗・飯豊連峰の雪形、の五章)から成り、ほかに巻頭に元会長は今西錦司さんが序文「飯豊礼讃」を、名誉会員で前越後支部長の藤島玄さんが監修の言葉「小新井君のひとと作品」を、それぞれ寄せている。

本書を通覧しての感想は、地の利を生かしてか雪の飯豊を多く収めており、なかに心をとらえる新鮮な作品が何点か見られ、それらに接する機会の少ない私達への貴重な贈り物となっている。が、同時に雪の飯豊に多くを費したため、名山飯豊の飯豊た

る特徴が今一步表現しきれなかったのではと思われる。例えば、藤島さんが「飯豊は深い」と表現したあの自然の深さ・豊かさ、信仰の山として崇められた歴史の面影、飯豊をめぐる山村のたたずまい等において。私のイメージの飯豊は、それらが渾然一体となって名山飯豊を醸しだしている。ことによると著者の飯豊観、或いは撮影意図が、そうした名山飯豊ではなく、所謂東北アルプスとしての飯豊連峰にあるのかもしれない。

ほかに、飯豊の世界とは相容れにくい空撮の多用、カラーとモノクロが対向頁に併存するレイアウト、写真面への山名刷込み等が、少々気になった。なお、六八頁の「上方左に飯岳(二三四六)」が望まれる」とある写真説明は誤りだろう。(上方左は、男体・太郎等の男体山群で、念のため右上方を見て奥白根山である。では飯岳とはいえず、奥白根山よりこの写真には入っていない。)

ともあれ飯豊山初の単行本となった本書により、飯豊山のさまざまな姿と、一冊の本の中に纏められて便利になった関連の文とが、机上で楽しめるようになったことを多くの飯豊ファンと共に慶びたい。

一九八一年六月、誠文堂新光社刊、A4判変型(三〇センチ×二三センチ、一六一頁、定価一万五千元 (滝川 清)

山の紋章 雪形

田淵行男著

春、山の雪解けが進むにつれてさまざまな残雪の形が山肌をいろどる。その中には馬や牛や人などの姿がくっきりと現れるものがある。農民たちはこの残雪絵像に、種まき爺・代掻き馬・雪鬼・黒牛・白牛・早乙女などとほほえましい名をつけ、この絵

特集・図書紹介

時四十五分のバスに間に合わせるべく下山はややピッチを上げる。バスは中央線高尾行きなので甲州街道に出たところでバスを降り、京王線高尾山口まで歩くことになる。

高尾山口駅からは「うかい鳥山」の自家用マイクロバスで大垂水峠への途中、冠木の里に作られた合掌造りの一棟の大広間で「山家焼」とビール、酒で打ち上げ会となる。歌こそ出なかったが、自己紹介やら四方山話で和気あいあいのうちに十八時になる。「うかい鳥山」のマイクロバスで高尾山口駅と高尾駅にそれぞれ運ばれ無事帰京した。

参加者 荒野康子、岩堀瑞子、大野盛彦、織内信彦、河上鎮治、木村俊博、高橋晋作、富田弘平、沼倉寛二郎他五名、計十四名
(富田弘平)

和久田弘一氏

からの手紙

拝啓、大変ご無沙汰致しておりますがお元氣のことと存じます。

日本山岳会の会報「山」の十一月号を、友人の折井君が送って来て呉れました。

貴君の書かれた「古いピッケルのことなど」読ませて戴き、実に懐しい名前が出て来て、昔の札幌で過した学生時代を思い出すことが出来ました。

特集・図書紹介 映像の出現を目安にして苗代を作ったり種をまいたりした。いわば素朴な自然暦であった。この残雪絵像をユキガタという。しか

年雪形の民間伝承は急速に忘却された。

この雪形に五十年間深い愛着を持ち続けたのが田淵行男氏。山岳写真・高山蝶研究の第一人者として田淵氏の名を知らぬ人はいないであろう。その田淵氏のもう一つの関心事がこの雪形であった。

氏のお住まいは信州安曇野。いわば雪形の宝庫である。氏はこの美しい自然の造形に魅せられ、失われゆく貴重な伝承文化財をつなぎとめるため、たんねんに古老を訪ねて聞きただし、これを撮影し記録にとどめようとした。

どの山のどのへんに、どんな形の、どんな名の雪形が、いつごろから現れ、いつごろ消えてゆくか。事は予想以上に困難であった。雪形伝承者は次々世を去ってゆく。雪形には現れてから消えるまでの期間の短いものが多く、かけつめた時は姿が崩れていく。気象条件などで撮影不可能の場合も多かったという。

氏はいくつもの新しい雪形も等見され、本書で紹介されているが、これをニューフェイスと名づけ、伝承の本当の雪形とはきびしう一線を画しておられる。立派な見識である。

信濃の雪形を集めつくした田淵氏はさらに全国の雪形の収録を思い立たれた。あいにく氏は難病に冒されたが、その病苦をおして東北・北陸に奔走され、さらに土地土地の協力者を得て、北は北海道から南は四国に至る雪形(山一三一座の雪形二九九)を集大成され「山の紋章 雪形」と題する

大冊豪華本にまとめて刊行された。

資料としての貴重さ、写真としての美しさ。これを解説する文は詩の如く情感あふれ、しかも苦心談がユーモアをまじえてつづられている。未解決に終わったいくつもの雪形も、本書が機縁となって判明の道が開けてくるであろう。山と民俗を愛好する者にとってこの上なくうれしい出版である。昭和五十六年七月、学研刊、A4判 三

七二頁、一万八千円 (広瀬 誠)

世界登攀史

偉大な登頂とその試み

エリック・ニュービー著
近藤 信 行 訳

原題は「大いなる登攀」とすべきところだが、原著の副題 Narrative History of Mountaineering を生かしてタイトルとしたとこの本のとがきで述べられている。またこの本や著者のことも同じくあとがきでかなり丁寧に解説されているので大変参考になる。

この本の著者の主観で選ばれた夫々の登山の話も、わが国で翻訳されている本がかなり参考に見られているので、耳新しい話が各所に見られ読んでいて楽しい。

ただこの本の著者が序で書いているように、英国以外の国の読者も考えているとすると、東洋、特にわが国の登山者の活躍を数行で片づけているのは気になる点だが、ベヒトルトの「ナンガ・パルバートのドイツ人」にしても、ドイツ語で書かれたものをかなり省いた英訳本から引用したり、メスナーについての記述も表現不足のところがあることからすれば、殆んど外国語に訳されることのないわが国の山岳書はない。ひとしいのかもしれない。このため、世界

登攀史と呼ぶには多少不満な部分が残るが、いたしかたないだろう。

訳者が近藤信行氏であることから、氏独特の、あとがきでも感じられるあの味わいのある日本語を訳文に期待したのだが、今回は見られなかった。先年作家の村上春樹が訳した「マイ・ロスト・シティ」のようにこなれ過ぎたものは期待しないにしても、山の翻訳書を日本文学の一角に据えることのできる最適の人と思っていただけに、この点は残念だった。

原題「GREAT ASCENTS」、一九八一年七月、草思社刊、二千五百円 (岡沢祐吉)

空撮 北アルプス

大森弘一郎・パノラマ作品集

この著者には二年前に「北アルプス稜線を飛ぶ」と題するワイドカラー版の航空写真集がある。本会報(第四一三号)でその紹介を行なった縁で、こんどの新著についても一筆することになった。私は写真技術については素人だし、まして航空写真ともなれば、一介の鑑賞者なので、技術的な批評などやれる柄ではない。この著者の独特な、むしろ独創的な撮影方法、それを上空から行なうための航空技術などについて、著者が「自分の「山」を求めて」と題して記した「あとがき」と、巻頭の西堀栄三郎氏の「序文」を読まれるのが一番よいと思う。

「大森君は学生時代、慶応の山岳部に籍を置き、卒業後も山を忘れられず、忙しい仕事のあい間にも山に近づくことを考えていた。短時間で高い所に行くために小型飛行機の操縦免許を取り、行くだけではもの足

実は、私の家で古い家屋の改造を致しましたら、粉失したと思って諦めておりましたニッケルクローム鋼製門田第一号のアイゼン(八本づめ)が出て来ました。アイゼン製作が門田老と私の出会いの始めであり、門田ビッケルが世に出る糸口になった私にとっては実に忘れることの出来ぬ代物です。

その時二個を作り、一個は北大山岳部仲間の小平俊平氏が持っておりましたが、遭難さわぎの時、北大の後輩に貸したのですが戻って来ず行方不明になってしまい、小生の持つておりました物も屋根裏にしまい込まれ所在不明になっており、暫くの間お目に掛れずじまいになっておりました。

この程出て来ましたので、門田老と一緒に苦労した二品とも第一号が揃ったわけです。アイゼンもビッケルと一緒に門田に納めるべきかとも考えております。今年の冬は非常に寒気がきびしいように思います。どうかお体にご注意被下るようお願い致します。勿々

十二月五日

和久田弘一

平柳一郎様

(追記)

門田、和久田両氏の出会いは、国学院大学山岳部報足引四号に詳論しました。(平柳一郎)

りず、カメラに凝りはじめた。それまただのカメラではない。自分で組み立てた数台の写真機で、山の印象を記録にとどめる。」と西堀さんは記している。

そして「写真は縦横六×七センチの比のものが一般的だが、人間の目は左右に二つある。その倍の六×一四センチが両眼の視野に近い」との発想から、苦心の末に空撮用の特殊カメラが、著者自身の手で造られた。

著者のいう、このような「開発行為」の一環として生まれたのが、今回のパノラマ作品集というわけである。前著は空からの北アルプス登山案内といった面が強かったせいか、「こう空から撮られては、味気ないね」といった批評もあった。こんどの作品集は、そのような登山案内的な要素を離れて、著者自身が空撮の喜びに浸って捉えた一瞬の山の姿が収められて、前著とは全く異なった味わいがある。

「空撮の面白さには、一瞬をつかみ取るということがある。動かない山に対して、こちらが動いている。一カ所待つというようなことはできないが、撮ったものは動かない山の姿だ。」なるほどと思つて作品を見直してみる。パノラマ写真は四十七点がある。ほとんど見開きで収められている。

三〇×二六、九九頁、一九八一年八月一日、山と溪谷社刊、定価三千八百円 (島田 賢)

西上州の岩山藪山

二木久夫著

いまだ二十余年前、私などが西上州の山や峠にひかれて出かけたのは、特定の山というよりも、むしろ山—山村—峠というような山旅が主であった。しかし、一旦開

けてしまったこの地域では、そうした楽しみ方はもはや出来なかつたと思う。それに変わるように多野郡、甘楽郡に響いたつ岩峰(それ程巨大なものはない)にひかれて、ひたむきに登りつづけている人が何人かいるようである。西上州の山の楽しみ方としては、現代では十分うなずける。

本書は、そうした一人であり、そのなかでは年長格の二木氏が過去十数年に亘る、西上州での山登りをまとめたものである。

多野郡と甘楽郡に二分されているが、多野郡では東福寺溪谷と周囲の岩峰、叶山、二子山等が何度かルートをかえて登られている。また甘楽郡では鹿岳、三ツ岩岳、立岩、大岩、二子岩、烏帽子岳、みどり岩などが、登山の対象とされている。

克明に綴られた紀行と、飽くことなく通いつめた登り方に、真面目そのものの二木氏独特の息吹きを感じる。

この種の書物としては、ルート図なり地図のほしいところだが、本の値段をおさえるためか、それが一葉もないのは珍らしい。

西上州の山々、ことに岩山をこれ程詳しく書きあらわした本としては初めてのものである。

B6判、8ポ二段組三六二頁、別刷写真二葉、スケッチ二葉、昭和五十六年八月二十五日現代旅行研究所発行、定価二千八百円 (望月達夫)

カモシカ物語

千葉彬司著

奥志賀のグレンデで少しばかりコースをはずして滑っていたら、樹林の中の深雪をカモシカが泳いでいた。梅雨明けの針ノ木

峠、小屋の裏手で人が騒いでいるのでぞいてみると、カモシカが一頭。上州吾妻線北側の人里に近い藪山で目の前にいたこともある。いずれもここ数年の経験だ。こうしてカモシカを見かける度合いがふえ、と、明治・大正期に山を歩いてた先人と同じ恵まれた状況にいるのかも知れないと思えてくる。ところが、カモシカと対面できる機会がふえたということは、喜ばしいというよりも、実は多くの問題を投げかけている状況なのだから、むしろ怖い世の中だ。

生きている化石とまでいわれるカモシカは、いま環境保全、自然保護問題の象徴の一つにまつりあげられてしまった。なぜなのか、理由を知らぬ人はいないだろうが、さてカモシカの生態となると、どれだけのことが知られているだろうか。

カモシカはオス、メスともに角がある。シカとはいうが、同じ偶蹄目ながら実はウシ科で、奈良公園にいるシカとは違うものだなどという基本的なことだって、改めて言われてみれば、そうだったかなと遠くを見るような目つきをする人も多いにちがいない。

カモシカが何をたべるのかといった生態の基本知識が明らかになったのだから、つい最近のことだということだが、この本を読むとよくわかる。捕獲されたカモシカを引きとりに行くのにクルマ一台ないという悪条件の中で、「一地方博物館が」「(いつメスとわかったのか説明されていないのは残念)」という子カモシカの生長を通じてカモシカの生態解明に力を入れた努力とその成果とは、考えようによっては、八千が峰初登頂よりも大きな意味を持つとさえ言える。特集・図書紹介

アルタイ山麓の冬

早乙女緩次

正月早々ブドー酒で知られる吉林省の通化市で、二週間を過ごした。ここはまだ未解放地区であるが、全国スキー競技大会に備え、われわれが事前に施設などについて助言するといった名目をつけたからだ。

通化での一週間は、最低気温は毎日マイナス三五度、最高気温はマイナス二〇度という極寒の環境であり、大会にはこの寒さでも連日各地区のコーチ、選手団が四百人も参加し、大会開会中は数千人の群集に囲まれ、極寒を吹き飛ばす熱気が漲っていた。寒さに対する慣れなのだろうか。

特に人目を引いたのは、会場まで十日間を費やして参画したアルタイ山麓からの選手団であった。ウイグル及びハザク族の若者は、下着一枚にジャンパー姿で、素手に無帽で笑みを絶やさぬ活躍振りであった。

数年前にいたシルクロード旅行等の思い出話しても、アルタイ選手団を私の部屋に招いたら、全員が二晩続けてトルファンの乾しブドーを持参して訪ねてくれた。そして和気あいあいの交歓が出来た。これは収穫であった。

中国のスキー滑走可能地は、すべて日本では考えられぬ極寒地域

紹介するだろう。

カモシカの捕獲も射殺も、あるいは保護も、私たちの *Photo life* と切り離しては考えられないという状況にあるいま、この本が解きあかしている内容は限りなく深く重い。

人とカモシカについて考えることは人と自然について考えることだと著者は語っている。カモシカを追放し殺すことは、やがて私たちの自身をほろぼすことに通じるのだ、と著者は本書全体で語っているように思われる。

中央新書、二二〇頁、四百六十円

(大森久雄)

垂直の上と下

小森康行著

クライマーと呼ばれる人たちの幾つかの好著の中で、これはすぐれたものと言えよう。鋸岳縦走、雪竜溪谷大鹿落し、穂高滝谷ドーム西壁と中央稜、甲斐駒七丈沢(以上厳冬期)、剣岳池ノ谷ドーム稜、前穂高東壁Dフェイス(以上積雪期)のほか谷川岳岩場の登高記録二篇、ほかに随想四篇。

岩壁の登高記録の記述はなかなかむずかしく、詳細に亘ってあればあるほど、現地を知らない読者を難解にみちびきやすいものだが、著者は明快な筆致で、粗略に失せず、くどきに過ぎず、要領よくテンポの表現に終始している。一篇ごとに付されたルート図(ハーケンの使用箇所など記入)が効果的である。

読者に晦渋の念を与えないのは、著者が、ルート発見が速く、難かしい箇所も卓越した技術でリズムミカルに攀ってしまおうか

らかも知れない。こちらにも一緒に登っているような気分が読まされてしまう。

「待望の仙人峠から眺めた剣の山容に圧倒され、剣岳をなめるんじやないぞと、ハンマーのようなもので、頭を一発ガンと……」とか、「山容ならマッターホルン、岩壁なら一ノ倉衝正面壁といった整った形に惹かれる。面喰いの尾根に出る所で、雪底ならぬ土底でもがくの面白い。

前穂東壁の吹雪の中で、仲間にはぐれ、一人雪洞に晴れを待つくだりには、沈着な行動が窺われる。入口を示すピッケルを挿しておく。朝、入口を塞いだ雪にハーケンで穴をあけ、ピッケルを外に向かって突き出し、穴をひろげて脱出するまでの叙述である。

本書には、かなりの数のクライマーが登場する。著者の仲間あり、ライバルあり、著者も彼等も数少ない未登の個所に執念を燃やす。しかしその個所が登られてしまえば、彼等はその初登を祝福する。お互いの間に、ひとしく山を好む者の心が通い合っているのだ。本書にはそんな場面がたくさん出てきて、私はその人たちのすべてに親近感を覚えた。

表紙カバーと口絵の写真十葉は著者撮影のもの、迫力がある。

昭和五十六年十月一日、中央公論社発行、四六判、二七三頁、定価千二百円

(川崎精雄)

雪崩の世界から

新田隆三著

雪崩だけを取扱った単行本は日本では大

変珍しい。この著者は初めに林学を学び、その後雪崩の研究に入り、スイス国立雪・雪崩研究所に留学した経歴を持つ。

本書は最近の十年ほどの間に雑誌に発表されたものをまとめたもので、随筆風に雪崩に関する問題点をいくつか取り上げている。軽いタッチの筆で、肩の凝らない読みものである。

内容は雪崩についての各種のエピソードが多岐にわたっており、雪崩の避け方や捜索など登山者必読の文字の外、著者専攻の森林についての話も興味深く、あるいは戦争と雪崩、スイス留学中に経験した暗い面にまでわたる。

雪崩を論じた文に出会うと、私には先ず疑いの目をもってそれを読むという悪いクセがある。しかしこの本だけは安心して読めた。この著者は、昔の有識者と違って、曖昧なことを尤もらしく述べることをしないからだ。古い雪崩の記事は単純な物理的知識に想像を加えて書かれたものが多かった。雪氷の専門家に近い人すら誤りを犯しやすい。雪崩という現象は極めて解明の難しいものでありながら、単純な論法で議論されて来たのである。

登山における雪崩遭難予防法は、雪崩学の研究とは別の分野の仕事であるが、そうしたことは本書では対象外になっている。また林学に関する専門用語が解説なしで現れ、門外者には内容をつかみにくい部分もあった。興味ある内容なので、惜しいことだと思ふ。

一九八一年十二月、古今書院発行、四六判、二一五頁、千四百円

(金坂一郎)

特集・図書紹介

であって、しかも積雪は一メートルを越える場所が無いというのである。アルタイの若者達は、マイ

第二回 日本登山医学研究会学術集会

お知らせ

- 一 会期 昭和57年5月28日(金) 13時～5月29日(土)
- 二 会場 京大会館 京都市左京区吉田河原町十五(九)(電)〇七五・七五一八三一(代)
- 三 招待講演 C・S・ハウス博士(予定)
- 四 一般演題募集要領

(1)演題申込 官製ハガキに演題・発表者・所属を明記して申し込み下さい。発表者複数の場合は演者を筆頭に記入のこと。

(2)発表形式 口演10分、討論5分の予定。スライド35%10枚まで。プロジェクター一台。

(3)締切 昭和57年4月10日必着

(4)送付先 〒604 京都市中京区壬生東高田町一(二) 京都市立病院 中島道郎(電)〇七五・三一一五三一(代)

五 懇親山行 集会終了後希望者のみ比良山麓の滋賀県の施設に一泊、5月30日(日)軽い比良山行を計画しています。

六 参加申込 研究会運営上参

ナス四五度でも、風が吹かなければアルペンでもクロスカントリーでも、千メートルを越えるゲレン

加人員を把握したいので、演題申し込みの有無と関係なく4月30日までにJAC医療委員会もしくは中島宛ご連絡下さい。

本研究会は高所医学のみならず広く登山のための医学全般にわたって討議したいと思っています。また医師でない登山家にも多数参加頂きたいと願っています。

(第二回日本登山医学研究会当番幹事 中島道郎 斎藤博生)

お知らせ

第二〇回 木暮理太郎翁碑前懇親会開催について

新緑の金山平で毎年行われております懇親会も本年で二〇回を迎えます。本年は左記要領で行います。皆様のご来会をお待ち申し上げます。

日時 5月15日(土) から16日。15日16時より碑前祭。18時より懇親会。16日は自由山行。

主力は、茅ヶ岳登山、ならびに深田久弥記念碑を訪ねる。

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平。

宿泊 右に同じ、有井館。(電)〇五五一四一五〇四五五

会費 七千円(記念品代をふく

デでトレーニングに取り組むとの話で、私と同行した名コーチ連もすっかり尻込みしてしまつた。日

む)

申込 JAC事務局
締切 5月10日

定員 四十名
責任者 〒400 甲府市武田三六二七 山村正光
(電)〇五五二五一一三一七

五

第五回 秋葉ダム さくらマラソン

お知らせ

日時 昭和57年4月4日(日) 11時スタート、小雨決行

場所 浜松駅前の遠州鉄道で西鹿島駅下車、そこから国鉄バス天竜線に乗り替え西川で降りる(浜松駅八時十九分発だと西川には十時に着く)

申込先 〒432 浜松市海老塚町三〇五 坂井八郎(静岡支部所属) 電〇五三四一五二一四五〇七

なお参加料は二千元(但し、JAC会員のみ千七百円(但し、宿泊の予約もできます(宿泊料は四千円前後)。またコースは湖岸の桜並木を走る一〇キロと二〇キロのコースです。

本の場合は湿度の面も考慮に入れる必要があるが、マイナス二〇度以下になれば、コー

チと医師の協議によってクロスカントリー競技が実行されるという

が、中国の大会場では、早朝八時マイナス二九度の気温でも、三〇キロコースのスタートが切られていたのに驚かされた。今回の旅行で一番楽しみにしていた白頭山行は、輸送手段の関係から三月にしてくれということ

で実現出来ず残念であったが、アルタイ山麓での全国大会開催の折にはまた招待するから……、との言葉でなぐさめられた。

・報告・

高所登山研究会

高所登山委員会



カット・芳野満彦

去る二月六日(土)午後三時半よりルームにて開かれた高所登山研究会には、七、八千峰の経験者も多数出席し、五十名ほどの出席者全員は熱心にこの日のテーマとなった高所生理や雪崩の問題を考えた。特に高度順化と関連した無酸素登山のことは、中島道郎会

十句

小林碧郎

標のふみあとつどふ嶺の神
氷壁は空のふかさに日を返す
スケートの渦うまれつ、夜明けたり
穴釣のそびらに小啄木鳥打ちいづる
黄昏れの氷湖をかへる狸夫かも
轟きて雪崩るるを日に眩しめり
奥谿の雪崩を誘ふ様の雨
樹の芽を摘みては越ゆる雪崩跡
久弥忌の斑雪ふみゆく茅ヶ嶽
春雷やひかるつぶての日雀たち

帰路は新設完備された吉林市松花湖スキー場を見学し、来シーズンの来日を約束して帰国した。

らして結論づけられ、説明されたが、これはこの会の一つの意義を示したと言えるだろう。また高山研究所の低圧訓練を経て、ダウラギリ一峰に無酸素で単独登頂した売会員の体験談を、医師の同席で聞いたことにより、低圧トレーニングの応用面で考えられるいろいろなことを、ある程度具体的に把握することができたのではないかとと思われる。

結局、現在の時点で、一般的に高度順化の訓練を行えるのは富士山ではないかということのようだったが、ではどのようにしたらよいのかといった点については、具体的な話はなかった。医師団はより多くの実例を夫々の体験者から得たいと望み、また資料の少ないヒマラヤの雪崩についても、体験によるデータを収集したいという申し出が講師の側からあった。

この研究会での詳しい報告は後日「山岳」に発表される。

参加者 川上隆 芳野満彦 須山敬 岡沢祐吉 平井拓雄 長谷川良典 雨宮節 吉野あつ子 前田文彦 溝口宏行 伊丹紹泰 富田雅昭 飯浜隆 大野紀和 千葉重美 高本信子 堀内章雄 佐藤知恵子 野崎真知子 富田由紀子 織田沢美知子 田中壮佑 岡部紀

会員名簿の誤植訂正について

先般、「山岳・第七十六年」といっしょに「81年度版 会員名簿」をお届け致しました。

名簿発行に際しましては、極力正確を期したつもりですが、若干の誤りがあり、ご迷惑をお掛け致しました。目下正誤表を作成中でありますので、お気付きの点は至急事務局までご連絡下さい。

総務担当理事

神崎忠男

正 遠藤晴行 名越昭男 佐竹春
江 山森欣一 柳沢幸弘 江村真
一 齊藤桂 山崎健 林桂子 宮
下秀樹 加藤保男 神崎忠男 堀
井昌子 田村扇一 神山良雄 禿
・報告・

冬山合宿

—北アルプス爺ヶ岳—

集会委員会



カット・松本慎太郎

私達集会委員会では、村木委員長をはじめ十名が去年の暮の十二月二十九日から一月三日まで冬山合宿を行いました。

場所は北アルプス爺ヶ岳の冷尾根です。赤岩尾根の隣にあって樹林帯の登りから雪壁、雪稜と変化のあるこの尾根に登り、爺ヶ岳と鹿島槍ヶ岳の頂上に立つことができました。その報告をします。

二十九日は先発の五名で標高二千のBCまでの荷上げです。沢を数回渡渉し尾根をラッセルして、私達が根拠地とした大谷原の東京理科大学山岳部の山荘に戻るまで十時間を要しました。翌三十日に後発の到着を待って全員BCに入りました。晴天の下を前日のトレースを使って快調な登りで、この日の夕焼けの鹿島槍ヶ岳は最高の美しさとなりました。

三十一日は全員で冷尾根に登り爺ヶ岳北峰に登頂しました。頂上

近くの雪壁と雪稜は四組のザイルパーティに分かれて登り、天候が雪に変わったこともあってきびしい登攀となりました。ここで五名はBCに戻り、残りの五名で明日の鹿島槍のアタックをめざし冷地にACを設営しました。この日の行動は十一時間にもわたりました。

元日の朝は残念ながらガスに囲まれ視界のない夜明けです。黒部側からの風が強く状態は良くありませんが、雑煮と甘酒で朝食をすませて七時に出発しました。そして途中休むことなく登り、無事鹿島槍ヶ岳南峰の頂上に立つことができました。ツェルトをかぶりひと休みしてACに戻り撤収です。冷尾根は昨日からの雪が積もりザイルを使って交互の下降となりました。途中サポート隊と合流し、BCで全員が新年の挨拶をすませたのは午後五時でした。

～82・《7/30(金)～8/13(金) 15日間》
ソ連・カフカスの山旅
○名峰エルブルース山(5,633m)登頂
○5,000m級の峰々のアルペンスキー
未踏のシルクロード踏査行

8/5(木)～8/19(木) 15日間

＝ソ連の山と旅の専門旅行社＝

(株)日ソ旅行社

政府登録一般
第98号

東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-20-1
担当：石元広昭

案内書呈

二日も朝から雪でバリエーションルートの登攀を諦め、午後、山荘に下山しました。同時に遠見尾根から五龍岳に登った理科大山岳部の人達もおりに来しました。したがって夜は合同の下山祝いと新年会です。残った食糧をすべて食卓に出し、交互に歌をうたいながら楽しい夜をすごしました。

このようにして合宿は終わりました。滑りやすい沢の渡渉、苦しい雪壁での雪かき、冬山は初めての女性二名の鹿島槍ヶ岳の登頂、とすべて楽しい思い出です。そして理科大の学生を含め、JACで活動している若い人達と山で交流できたのが一番良かったことだと思います。



アフガニスタン・タシクルガン／吉阪

参加者：C 前田文彦、S 秋元孝子、村木富士、小原 俊、中沢光江、若林幸子、大槻久江、勝山康雄（青年懇談会）、砂田定夫、渡辺俊雄（学生部）。（前田文彦）

ルーム日誌
(57年1月)

11日(月) 理事会

18日(月) 図書委員会

19日(火) 婦人懇談会

20日(水) 三水会

21日(木) 会報編集委、指導委

22日(金) 自然保護委講演会

26日(火) 集會委、指導委

27日(水) 高所登山委、自然保護委

28日(木) 海外委員会

29日(金) 科学研究委員会

今月の来室者 360名

会員移動(1月)

退会

八七八九 齊木計男

二七一二 岡 茂雄

除籍取消

四九五三 藤森元夫

六三八四 井原蓉子

物故

一六二四 藤沢乙三

姓変更

八七九九 宮本雅江→成松へ

八一四七 竹村節子→福士へ

七九二三 根本知子→山田へ

夫婦会員へ

七九六三 福士季夫と

八一四七 福士節子(旧姓竹村)

会費未納の方は
お早く納入願います
事務局

あとがき 今回の「サリーン」総裁よりの書簡」にもある一橋大学山岳部の遭難のことですが、この隊の土方君が本会学生部のメンバーであったことは先の会報でも報告されています。

数年前、本会の若手メンバーが山中湖畔の近くで一晚語り明かしたことがありました。その時参加した数名の学生の中に、この土方君が混っていました。ワラジを食べてでも生き残りそうなゴツイ連中の大勢いるなかで、細面のニヒルな感じさえる土方君が、仲間と一緒に何とかが節を歌った、大半が眠ってしまったあとでも、数名の者と夜が白み始めるまで山登りのことを語っていたことなど、特に言葉を交わしたこともないのですが、思い浮かびます。冷い雪の中で、安らかに眠っているのでしょうか。(O)

昭和五十七年三月二十日発行

102 東京都千代田区四番町四一五

サンビニウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡 沢 祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三三八二九番

東京都港区赤坂二丁目三番六号

株式会社 技報堂